

余暇施設開発の実際 27.

スキー場関係者の余暇活動意識の出現状況について

スキー場関係者 余暇活動意識 余暇施設開発

正会員 ○稲垣菜月*1

西口真也*2

三上訓顯*3

1. はじめに

本稿以下3稿は、前年度*1と同様のアンケート調査をスキー場関係者に対して行った。余暇活動に対するアンケートの回答結果から、スキー場関係者の余暇活動への意識を明らかにするとともに、スキー場関係者とスキー場利用者との余暇活動意識の関係性を明らかにすることが本一連の研究目的である。

そこで本報では、スキー場関係者から見た余暇活動に対する意識の出現状況について述べる。

2. 余暇活動意識調査結果の出現状況

余暇活動意識調査は、2011年1月～2月に実施、対象は全国502か所のスキー場関係者とした。調査は郵送とファックスによるアンケート方式とし、設問は、従来の余暇白書で使用した余暇活動50項目を用い、関心度4段階(多いにある、少しある、薄い、全くない)で評価し、被験者の属性も調べた。得られた有効サンプル数は114サンプルであった。

114サンプルの回答を集計し、50項目及び関心度4段階評価別に出現度とその構成比を示したのが表1である。各50項目中、「関心がある」の評価の出現数の最大値から順に並べ替えており、また各50項目中の関心度評価が最大値である項目にハッチングを施した。

全体の出現状況を50項目の最大値でみると、「関心が多いにある」2項目、「少しある」25項目、「薄い」22項目、「全くない」1項目となる。また、「多いにある」と「少しある」の関心の強いものが27項目、「薄い」と「全くない」の弱いものが23項目となり、関心の有無では全体で二分された出現状況となっている。しかし、「多いにある」と「全くない」の両極端の出現数は3項目と少なく、「少しある」、「薄い」に集中する傾向がみられ、二分された中で、大きく偏りがある結果となった。全出現数の平均値28.50、標準偏差19.72である。

3. 出現数構成比

50項目の関心度評価の構成比を見ると、「多いにある」が50%を超えるものは2項目、「全くない」は0項目であった。つまり、多くの関心度は「少しある」と「薄い」に収束している。従って、「少しある」、「薄い」の構成比がそれぞれ50%を超える18項目を抽出することで、細かな特徴を見出すことができると判断し、18

表1 調査結果の出現数と構成比

評価	関心度				関心度構成比%			
	4多いにある	3少しある	2薄い	1全くない	4	3	2	1
43スキー	83	21	8	2	72.8	18.4	7.0	1.8
44スノーボード	75	28	7	4	65.8	24.6	6.1	3.5
03国内観光旅行	33	54	20	7	28.9	47.4	17.5	6.2
30ドライブ	33	60	16	5	28.9	52.6	14.0	4.5
31ピクニック・散歩	31	59	17	7	27.3	51.3	15.2	6.2
01外食	28	61	23	2	24.6	53.5	20.2	1.7
18テレビゲーム	28	43	31	12	24.6	37.7	27.2	10.5
48登山・キャンプ	28	59	20	7	24.6	51.7	17.5	6.2
19パソコン	26	68	16	4	22.8	59.6	14.0	3.6
16テレビの観賞	23	65	20	6	20.2	57.0	17.5	5.3
07スポーツ観戦	22	57	28	7	19.3	50.0	24.8	6.1
17ビデオの観賞	21	69	28	6	18.4	51.7	24.6	5.3
20音楽鑑賞	20	58	30	6	17.5	50.9	28.3	5.3
04海外観光旅行	18	45	40	11	15.8	39.4	35.1	9.7
27マンガ・雑誌	14	54	34	12	12.3	47.4	29.8	10.5
39ゴルフ・テニス	13	54	30	17	11.4	47.4	26.3	14.9
42サッカー	12	56	34	10	10.5	50.9	29.8	8.8
11動物園他	11	58	32	13	9.6	50.9	28.1	11.4
10ゲーセン・遊園地	10	59	30	15	8.8	51.8	26.3	13.1
13カラオケ	10	44	43	17	8.8	38.6	37.7	14.9
22写真・ビデオの製作	9	47	37	21	7.9	41.2	32.5	18.4
09パチンコ他	8	34	39	33	7.0	29.8	34.3	28.9
33ジョギング・マラソン	8	64	25	17	7.0	56.2	21.9	14.9
12美術館・催し物	7	35	53	19	6.1	30.7	46.5	16.7
41野球・ソフトボール	7	56	38	13	6.1	48.1	33.3	11.5
47魚釣り	7	56	39	12	6.1	48.1	34.2	10.6
02バー・スタック	6	27	37	24	5.3	23.2	50.0	21.5
48サイクリング	6	44	47	17	5.3	38.6	41.2	14.9
05映画鑑賞	5	48	31	10	4.4	42.1	44.7	8.8
06音楽会・観劇	5	37	55	17	4.4	32.4	48.3	14.9
28読書・絵画	5	41	46	19	4.4	35.9	42.9	16.8
35フィットネス	5	46	44	19	4.4	40.3	38.8	16.7
49マリンスポーツ	5	42	46	21	4.4	36.8	40.3	18.5
29園芸・庭いじり	4	33	46	31	3.5	28.9	40.3	27.3
34体操	4	41	48	21	3.5	35.9	42.1	18.5
45アイススケート	3	47	42	22	2.6	41.2	36.8	19.4
08空くじ・サッカーくじ	2	46	45	21	1.7	40.3	39.5	18.5
24絵画・模型制作	2	14	52	46	1.7	12.3	45.6	40.4
32ボウリング	2	36	56	20	1.7	31.6	49.2	17.5
37柔道・剣道	2	21	59	33	1.7	18.5	50.8	28.9
40卓球・バドミントン	2	33	50	29	1.7	28.9	43.9	25.5
50水泳	2	38	53	21	1.7	33.3	46.5	18.5
15トランプ他	1	20	57	38	0.9	17.5	50.0	31.6
36バレー・バスケット	1	36	55	22	0.9	31.6	48.2	19.3
38乗馬	1	14	43	58	0.9	12.3	37.7	49.1
14囲碁・将棋	0	9	59	48	0.0	7.9	51.8	40.3
21楽器演奏	0	20	63	31	0.0	17.5	55.3	27.2
23文芸の創作	0	12	55	47	0.0	10.5	48.2	41.3
25織物・和装	0	15	53	46	0.0	13.2	46.5	40.3
28茶道他	0	13	52	49	0.0	11.4	45.8	43.0

項目に本報研究テーマのスキーを最下段に加えたグラフが図1である。

関心が「少しある」は13項目であり、これを見ると、パソコン59.6%、テレビの観賞57.0%、ジョギング・マラソン56.2%、外食53.5%、ドライブ52.6%、ゲームセンター・遊園地51.8%、登

A Practical Site of Development on the Leisure Facilities Part 27.

About the appearance situation of the leisure activity consideration of the staff of ski areas.

INAGAKI Natsuki et al

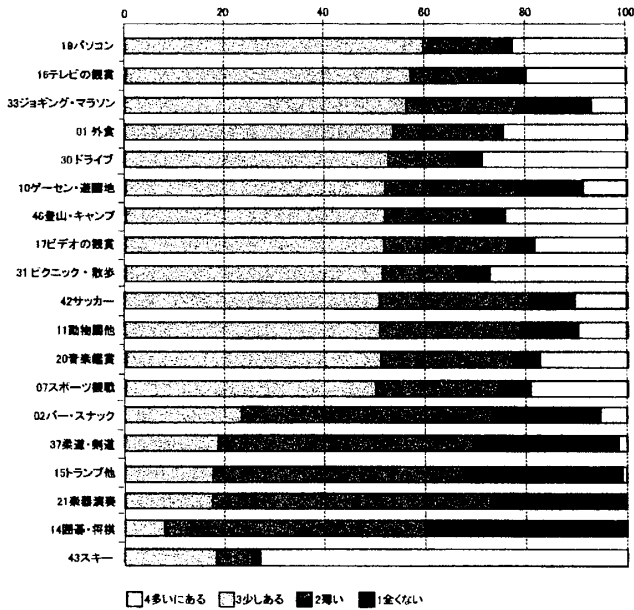


図1 関心度構成比

山・キャンプ 51.7%、ビデオの観賞 51.7%、ピクニック・散歩 51.3%、サッカー 50.9%、動物園他 50.9%、音楽鑑賞 50.9%、スポーツ観戦 50.0%である。8項目がアウトドアで、友人や集団で行われるものが過半数を占めている。残り5項目の趣味活動はテレビ観賞や音楽鑑賞など、受動的かつ主に個人で行われるものが多いなど、プライベート性が高いものが上がってきている。

関心が「薄い」では5項目が該当しており、楽器演奏 55.3%、囲碁・将棋 51.8%、柔道・剣道 50.9%、トランプ他 50.0%、バー・スナック 50.0%である。本格的な技術を要する楽器演奏や柔道、囲碁やトランプといったインドアで複数で行う活動には興味が現れなかった。

また関心が「多いにある」が最大値になるとともに、50%を超える項目はスキー 72.8%、スノーボード 65.8%であり、スキー関連に強い興味が出ていることが分かる。これはスキー場関係者独自の特徴であると言える。

以上のことから、スキー、スノーボードを主な趣味としながら、それ以外のドライブや登山といったアウトドアも仲間とともに嗜む反面、インドアではテレビや音楽観賞といった専門的な技術を必要としない、個人でできる範囲の活動でプライベートな時間を大切にしている様子が見受けられる。アウトドア・インドアでパブリックな時間とプライベートな時間が明確に分けられているのが特徴である。

表2 被験者属性

今後の運営方針	現状維持でよい	発展させたい	縮小したい	廃棄したい	悩んでいる		
出願数	21	81	3	2	7		
構成比	18.4	71.1	2.6	1.8	6.1		
利用者一回あたりの費用	0~2000円	2000~4000円	4000~8000円	8000~8000円	8000~10000円	10000円以上	
出願数	25	57	25	4	3	0	
構成比	21.9	50.0	21.9	3.6	2.8	0.0	
利用者一回あたりの滞在時間	1~2時間	2~4時間	4~6時間	6~12時間	12~24時間	1日以上	
出願数	2	27	65	18	1	1	
構成比	1.8	23.7	57.0	15.7	0.9	0.9	
スキー場の商圏	近隣の近所のみ	近隣市町村	県内	県外	大都市圏	全国	海外
出願数	10	41	26	14	15	8	0
構成比	8.8	35.9	22.8	12.3	13.1	7.1	0.0
性別	男	女					
出願数	101	13					
構成比	88.6	11.4					
年齢	20代以下	30代	40代	50代	50代以上		
出願数	6	23	43	29	13		
構成比	5.3	20.2	37.7	25.4	11.4		

3. 回答者の属性について

被験者属性を示した表2を見ると、今後の運営方針については「発展させたい」、利用者一回あたりの費用は「2000～4000円」、一回あたりの滞在時間は「4～6時間」、スキー場の商圏は「近隣市町村」、という傾向が出ている。運営方針については、「現状維持でよい」と「発展させたい」を合わせると9割近くになり、経営意欲があり向上心の高い被験者が多くみられる。また40～50代の団塊の世代を含む中高年層が多いことも特徴である。

次に、利用者の滞在時間が12時間を超えることがほとんどなく、日帰りで利用する者が近隣市町村から集まってくることから、スキーを旅行ではなく単なるスポーツとして楽しんでいる人が多いようである。大都市圏、全国から集客しているスキー場は少なく、それらを利用しているのは旅行の一環であり、近隣に他の観光要素が付属している可能性が高いこともうかがえる。

これらよりまとめると、スポーツとしてのスキーの魅力や、リピート者の獲得がスキー場を発展させるひとつの要素であるといえる。

4. まとめ

アンケート調査解析の結果、スキー場関係者の余暇活動意識について顕著な特徴が見て取れるデータを得ることができた。このデータを用いて次報以降で、彼らの意識構造や活動のための要因を分析し、さらに前年度の利用者自身のデータと合わせて比較・考察する。

参考文献

注1. 余暇施設開発の実際 24～26. 日本建築学会大会梗概集E-1分冊, pp 335～240, 2010.

※1 名古屋市立大学大学院博士前期課程、芸術工学学士
 ※2 名古屋市立大学大学院 研究員・経営学
 ※3 名古屋市立大学大学院 教授・博士(デザイン学)

Nagoya City University Graduate School .
 Nagoya City University Graduate School .
 Nagoya City University Graduate School .Prof.Nagoya City University Graduate School .Ph.D.